

初等教育における身体表現活動を考える

— 歌唱・器楽活動に生かしていくために —

瀬戸間 彩香
教科領域コース

1. 研究の目的

本稿では、身体表現の特徴や意義を明らかにし、身体表現を学習指導要領音楽編の表現分野（特に歌唱や器楽）に生かすためには、どのような身体表現が効果的なのかということを考えることを目的とする。

表現分野（特に歌唱や器楽）における授業では、音楽表現をするために必要な技能を身に付けた上で表現を工夫する活動に移ることが多く、表現を工夫する活動に十分に時間が割けないことが多いように感じている。そこで、学部時に興味を持ち、研究したこともある身体表現について、授業実践を通してどのような活動が効果的なのか実践してみたいと考え、目的とした。

2. 小学校学習指導要領による身体表現について

身体表現は指導内容として学習指導要領では取り上げられてはならず、方法や学習目的のための手段のみが記載されている。また、体を動かす活動のねらいは、音楽に対して親しみを持つ、楽曲の構造について知る、自分と他者の感じ方・考え方を知り、視野を広げることである。学習指導要領（平成 29 年度改訂）においては、第 1 学年及び第 2 学年の目標の A 表現、(イ) 曲想と音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気づくことでは、次のような記述が見られた。「低学年の児童は、体の動きを伴いながら曲の雰囲気などを楽しんで歌ったり、歌詞に登場する人物や動物になりきって歌ったりする傾向が見られる。」（小学校学習指導要領解説（平成 29 年度告示） 音楽編 2018：32）

また、学習指導要領の音楽科の目標に「表現及び鑑賞を通じて、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」とある。低学年の「鑑賞」指導のなかに身体反応の快さを感じ取りやすい音楽、日常の生活に関連して、情景を思い浮かべやすい楽曲を取り扱うことが明記されている。鑑賞指導において楽曲のどの部分が気持ちを向上させ、自然に身体が反応するのか。加えて、どの音の刺激が身体の一部を反応させるのかを観察する必要がある。こんな身体反応こそが低学年においてはとって重要であり指導目標に迫る視点にもなり得る。低学年で培った身体反応を基に、高学年では、リズム、旋律に対する感覚など基礎的な能力を身に付けさせることで豊かな感性が高まると考える。しかしながら、人の内にある感情・感動を共有するためのものであって、音楽における身体表現がコミュニケーション媒体として重要であることから、身体反応のみを指導の対象とするのではなく、身体表現にいかにつながっていくのかの部分を含めて対象にすべきであると考え、と大谷は述べている。身体反応から身体表現に繋げていくことは、感じとったことそのものから、それをイメージ化し表現し伝えることに

変えることである。しかし、児童にとっては、生活経験の少なさからなかなか困難である。そこで、映画・写真・情景画、視覚教材の工夫はもちろん、学習活動のなかでイメージを膨らますための場面設定が極めて重要になるのであるとも述べている。(大谷：2012：501 - 502)

3. 実践及び考察

2024年5月～6月の三週間、小学2年生の音楽科の授業実践を行った。本実習では、「ドレミであそぼう」という単元を扱い、主に身体表現を伴う授業を行った。

本実習で扱った「ドレミであそぼう」という単元は、音の高低を感じながら歌唱、演奏することがポイントとなる単元である。身体表現を伴う活動については、ドレミ風船を指さしながら音の高低を確認し、『ドレミの歌』では身体を用いて音の高低を実感できるようにする。また、『かえるのがっしょう』では自分が想像するかえるになりきり、演奏の仕方を考える。そして、『ぷっかりくじら』ではリズムにあわせてスキップすることを行った。

事例1「ドレミのうた」

対象：第2学年（25名）

『ドレミのうた』を歌いながら、ドレミ風船を指差ししたり、音の高さに合わせて屈んでいるところから少しずつ立ち上がったといった身体表現活動を取り入れ、階名や音の高低を感じ取れているかを確認した。

本授業の振り返りワークシートによると、本授業の課題である「音のたかさに気をつけながらドレミのうたをうたおう。」に対する自己評価（5点満点）の平均が4.1である。また、9割近くの児童が本時で学んだこと、感想に「音の高さの変化」についての記述があり、大多数の児童が本授業を通して音の高さの変化に気づくことができている。本実践を通して、身体表現を伴うことでねらいである音の高さを感じさせることはできたのではないかと感じた。また、身体表現に児童は意欲的に取り組んでおり、ワークシートにも「楽しかったのでまたやりたい」との記述もあった。しかし、身体表現はあくまで今回は高さを認識しやすくするものであり、歌唱がおろそかになっている児童もややいたため、おろそかにならないように指導していかななくてはならないと改めて感じた。

<ドレミ風船について>

音の高低について把握することが難しい児童でも再度ドレミ風船を用いて確認すると、音が高くなっていることに気がつくことができおり、ドレミ風船を用いることはやはり音の高低を理解するには効果的であると考えた。しかし、音の高低を確認する場合に前に掲示する際に教科書付属のものを使うと指を指していても、後ろの席の児童は音が高くなっている実感がやや湧きにくくなってしまっていた。そのため、音の幅も考慮しながら、遠くの児童でも音の高低が分かりやすいように音名の間隔をあけたものを作成し、使用するか、手元の教科書を使用した方がよいと感じた。

「鍵盤」は左から右に行くほど音が高くなるが、教科書に載っている「ドレミ風船」は下から上に行くほど音が高くなっている。それは、五線譜上では、



図1 ドレミ風船

下から上に行くと音が高くなるため、「ドレミ風船」は音の高低を理解することに適していると考えられる。

事例2 「かえるのがっしょう」

対象：第2学年（26名）

『ドレミのうた』と同様にドレミ風船を指さし、音の高低について確認した。そして、『かえるのがっしょう』の歌詞にある「クワッ・クワッ・クワッ」という部分はどのようなかえるがどんな風に鳴いているかどうかということを見聞自身に考えさせ、実際にかえるになりきってもらい、自分なりのかえるのがっしょうのイメージを持ち、どのように演奏したらよいか考え、鍵盤ハーモニカを演奏できるようにした。



譜例 「かえるのうた」

＜児童がイメージしたかえる＞（ワークシートより）

楽しそう、ジャンプしている、元気な、大きな、飛び跳ねている、すわっている、遊んでいる、笑っている、こどもの、困っている、休んでいる

本授業の振り返りワークシートによると、本授業の課題である「音のたかさに気をつけながらかえるのがっしょうをすてきにえんそうしよう。」に対する自己評価（5点満点）の平均が4.3であった。大多数の児童が本授業を通して音の高さの変化に気づき、鍵盤ハーモニカを演奏することができている。また、鍵盤ハーモニカの演奏の工夫についても授業で扱ったため、半数の児童は鍵盤ハーモニカについての記述が見られた。一方、残り半数の児童がワークシートの本時で気づいたこととして、「音の高さの変化」についての記述があった。筆者は、ワークシートには音の高さについて記述する部分は設けなかったが、児童に直接問うと、その変化について答えることができていた。したがって本授業の活動を通して音の高さの変化に気づくことができているといえる。

本実践では、鳴いているかえるになりきるといった身体表現を伴うことで児童は意欲的に自分なりのかえるのイメージを持ち、なりきることができていた。しかし、どのように演奏したらよいかというところまで考え、ワークシートに記述することのできている児童は全体の34%であった。低学年児童ということもあり、考えたことを言葉にすることが難しかったように感じた。そのため、「どのように演奏したらよいか」ということについては「児童がイメージするかえる」を予想し、考えることが難しい児童のために演奏の仕方についてのキーワードをヒントとして記載しておくようにする必要があったと考える。

事例3 「ぷっかりくじら」

対象：第2学年（26名）

『ドレミのうた』と『かえるのがっしょう』と同様にドレミ風船を指さし、音の高低について確認した。『ぷっかりくじら』は、付点のリズムが特徴的な曲であるため、曲に出てくる付点のリズムに合わせてスキップをする活動を取り入れて授業実践を行った。

本授業の振り返りワークシートによると、本授業の課題である「おたがいのこえやがっきの音をききながら、音の高さに気をつけてえんそうできた。」に対する自己評価（5点満点）の平均が4.2である。大多数の児童が本授業を通して音の高さの変化に気づき、歌唱したり、鍵盤ハーモニカを演奏したりすることができている。

スキップをすることで付点のリズムを感じやすくすることはできたと感じた。また、意欲的に活動に取り組む様子が見受けられた。しかし、スキップをすることが楽しいだけでリズムに上手くのれない児童や、スキップが上手くできない児童もいたため、手拍子でリズムを確認した。あくまで、リズムにのりやすくさせるための手段とし、授業では時間を取りすぎない方がよいと感じた。

上記の事例1～3で述べた身体表現活動を取り入れた授業実践を通して、身体表現活動に児童が楽しみながら意欲的に取り組んでいる様子が見受けられたため、学習指導要領で述べられている

「音楽活動に親しみをもつ」ようにすることができ、今後の音楽活動によりよい影響をもたらすのではないかと考える。そして、身体を使って高さを表したり、「ドレミ風船」を用いたりすることで音の高低を認識することを通して、学習指導要領で述べられている「楽曲の構造」を学ぶことができ、児童の音楽理解に繋がったのではないかと考えられる。また、事例2の『かえるのがっしょう』では、学習指導要領で述べられている「自分の感じ方・考え方を表し、他者の感じ方・考え方を知り、ひいては自らの感じ方・考え方を拓げること」ができ、言葉で表すことが難しい低学年児童には効果的であると改めて感じた。

4. おわりに

身体表現を器楽・歌唱活動に生かすためには、どのような身体表現が効果的なのかということについて授業実践を通して考えてきた。児童の発達段階や興味・関心に合わせた身体表現を取り入れることで授業に対する児童の意欲向上に繋がった。そのため、児童の発達段階や興味・関心に合わせ、よりよく器楽・歌唱活動に取り組めるような身体表現活動が学校現場で取り入れられるとよいのではないかと考える。今後もよりよく器楽・歌唱活動に取り組めるような身体表現活動について検討していきたい。

参考文献

- 1) 小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 音楽編（文部科学省）
- 2) 大谷恵世 2012「小学校音楽「豊かな表現の工夫」をめざした実践の分析—身体表現を十区とした事例から—」『四天王寺大学紀要』54：501 - 502
- 3) 新実徳英（監修）2014 『小学音楽 おんがくのおくりもの2』東京：教育出版。